例会記録

第39回日本医史学会神奈川地方会秋季例会・日本医史学会9月学術例会の合同例会

平成24年9月8日（土）
鶴見大学歯学部3号館2階3-1講堂

一般講演

1.「1860年代横浜；わが国の近代眼科医療の曙」　鈴木高遠
2.「精神医療の横浜病院100周年のあゆみ」　津田昌利
3.「薬師信仰について」　杉田暉道（欠演）
4.「横浜のペスト史」　滝上　正（欠演）
5.「子宮頸がんの予防ワクチン」　佐分利保雄
6.「近代看護婦田中定の業績と今日的意義」　上坂良子

特別講演

「オスラーの教え子・佐伯理一郎の人と業績＆新渡戸稲造との交遊」　渡邉昭彦

日本医史学会10月例会　平成24年10月27日（土）
順天堂大学医学部11号館16階北フロア

1. 大久保忠寛の『病幼院創立意見』（安政4年）と，長崎養生所，養育院，東京府病院　稲松孝思
2.「温疫論」と「断毒論」の比較考察　西巻明彦

日本医史学会11月例会　平成24年11月24日（土）
順天堂大学医学部11号館16階北フロア

1. 大正11年制定，昭和2年施行の健康保険法についての1考察
――関東大震災と医療体制史を含めて――　渡部幹夫
2. 中島友玄の京遊備忘　其の二
――京遊厨費録より見た遊学生活――　中島洋一

書　評

寺澤捷年 著
『吉益東洞の研究――日本漢方創造の思想――』

欧米の研究者から「日本の漢方医学の特徴はなんですか．中医学とはどう違うのですか？」という質問を良く受ける．この質問に的確に答えるのはかなり難しい．

一言で言うならば，日本の漢方医学は，中医学で最も重視している部分を不要のものとし，別の方法論で処方を運用するところに最も大きな特色があるのだが，そのような形を作ったのが，吉益東洞という人なのである．

著者の寺澤捷年先生は，その吉益東洞に焦点をあて，これまでの東洞に関する多くの研究と，自らの手で解明した事実を踏まえ，40年余に及ぶ臨床経験の上に立って本書を執筆された．それらは過去の研究を参考にしてはいても，さらに奥深く新しい目で新解釈を施し，細かい事跡にまで踏み込んでいる．ここには東洞の実像を解明する試みが満ち溢れている．

この本の特徴は3点に集約される．

一つは，東洞の活躍した時代の彼の周辺の人々の状況や関連文献から東洞の学術思想と医術そのものを読み解こうとしていることである．これは，特に徂徠学が東洞の医学思想に決定的な影響

を与えたことを始めとし，「方証相対」が松原一閑斎の影響下に生まれたものであることを明らかにするなどの記述に表れている．

もう一つは，東洞の著作を丹念に読み，深く掘り下げていることである．ここにはこれまでにない多くの新知見が見られる．特に，『医断』と『医事或問』の文章を徹底的に読み解くことによって，東洞の医学思想を明らかにしているのは，後学にとって極めて有益である．毒の概念の取り扱いがこの中で繰り返し論じられているからである．

更にもう一つは，著者が，その40年余にわたる臨床経験に基く透徹した臨床眼を駆使して，これまで不明であった部分を，推測を交えながらも積極的に解明しようとする姿勢を見せていることである．それは，暗黙知を如何に臨床に応用するかを熟知している人にして始めて言える言葉であると感じる．

本書の白眉のひとつは，東洞が，梅毒に対する治療法をどのようにして獲得していったのか，そしてその過程で毒をどのように認識していったのかということが，数多くの文献をひきながら丁寧に論及されているところにある．これほど丹念に毒の概念を追求しながら，しかし先生は最終的に毒について断定した表現をあえて避けておられる．学者・寺澤捷年先生の学者たる所以であろう．しかしながら読者は，この本を通して読むことによって，東洞が毒と考えたものが何であるかについて思いをいたすことが出来る．

中医学のように病因病機を明らかにして治療を行うのではなく，患者の症候に最も適した処方を，多変量解析を行ったように決定していく方法論を「方証相対」という．この方法論は上述のように松原一閑斎にその起原を有するものであると言われているが，『傷寒論』処方において，それを徹底した形で確立したのは東洞である．そして，「暗黙知」の領域に属するものであるこの方法論を身につけるために『方極』や『薬徴』をはじめとするいくつもの書を著した．しかしながら，“我々は東洞の思考モデルをひとたび教条とした瞬間から，「ありのままのもの」が見えなくなる（結語より）”という落とし穴のあることもまた十分に注意しなければならないという警告を発することも，先生は忘れていない．

東洞が究極の目標としたものは何であったのか．それは寺澤先生のいわれるごとく「医療システム全体の変革」であったと評者は思う．

現在，全世界に通行している中国伝統医学は中医学（TCM）である．世界において漢方医学（Kampo Medicine）という名称はごく一部の人しか理解していない．というより知らない人の方が圧倒的に多い．しかしながら，日本の漢方医学は，その方法論において世界を先取りしている．そのことを知っている人は，日本の中ですら少ない．その漢方医学の根本的な形を作ったのが，冒頭で述べたように吉益東洞であることを知っている人も少ない．

今，ISO問題でゆれる日本の漢方医学界において，この本の出版は，まさに時宜を得たものであり，この医学に携わる全ての人々が知っておくべきであると思われる知識がこの中にある．まさに「医療システム全体の変革」を必要としている日本の漢方医学界にあって，これは必須の本であろう．

新たな吉益東洞研究が，茲に始まった．

（安井　廣迪）

［岩波書店，〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2丁目5-5，TEL. 03（5210）4000，2012年1月，A5判，274頁，7,000円＋税］